The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	紙コップ積み上げアート・ワークショップ : こども福祉と大学入門教育の事例
Author(s)	島先, 京一
Citation	デザイン理論. 2019, 73, p. 106-107
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71208
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紙コップ積み上げアート・ワークショップ
── こども福祉と大学入門教育の事例 ──

島先京一　成安造形大学

ここ数年，大量の市販の紙コップを用意し，参加者にその紙コップを積み上げてもらうというアート・ワークショップを展開してきた。今回のパネル発表においては，特にこども福祉の現場における実践例と，報告者の勤務する大学における新入生を対象とした大学入門教育における実践例について，その経緯や成果について紹介した。

このワークショップは，報告者の長年の関心の対象である，障害児と平均児がともにフラットな枠組みのなかで楽しむことができる，ものつくり遊びの追求に端を発している。報告者はその取り組みの中で，指導者がワークショップの目的設定から，能力主義的な観点を取り除くことが重要であるという認識に到達した。そしてそのために，現代美術の一つの傾向から方法論を学ぶことが有効であることを見出した。それは同型の既製品を大量に組み合わせる，ある種のインスタレーションの表現である。（註）報告者は現代美術の実験的な表現を参考にしながら，障害児を中心としたワークショップの現場に，主にはホームセンター等で購入することができる，通常は美術指導の素材とは見なされることのない素材を持ち込み，いたずら心を一つのキーワードとしたものつくり遊びの可能性を追求してきた。

紙コップには，積み上げるという行為に際して特別な訓練を必要としないこと，比較的，安価に大量に準備できること，しかしインスタレーションの成果は，そのアプローチの気安さからすれば意外なほどの美的な爽快感や達成感をもたらしてくれること，等といった利点がある。また技術面での制約が少ないにもかかわらず，ある特定の成果の追求にはそれなりの創意工夫や努力が必要であることも，ワークショップ素材としての利点であるといえよう。報告者はワークショップの開始に当たってまず参加者に，高く積み上げることを目標とするように促す。この目標設定のわかりやすさも，この素材の利点といってよいであろう。

この高く積み上げるという目標設定は，きわめて分かり易いにもかかわらず，参加者の大半を夢中にさせる。小学生を中心としたこども福祉の現場では，こどもたちはそれぞれ学年や年齢の違いを超えて，自らの背の高さを超える積み上げを目指し，目を輝かせる。また報告者のこれまでの経験から，こどもたちと保護者が参加したワークショップの現場では，小学校高学年の男児とその父親の組み合わせが，最も熱心に高さを競う。特に父親の熱中ぶりは，このワークショップが大人をも夢中にさせてくれる魅力をもっていることの証左であろう。生意気盛りの高校生や大学生も，この高く積み上げるという簡潔な目標設定の前では，こども心を蘇らせて熱心な取り組みを見せてくれる。

紙コップを積み上げるという行為そのものは，特別な訓練は特に必要としない，誰にとっても親しみやすい課題なのであるが，しかし一方で，高く積み上げるためには慎重さと創意・工夫が要求される。そしてそのような慎重さや創意・工夫は，多くの場合，作者のみならずワークショップの見学者をも感動させる，美的な成果にストレートに反映され

る。このように，入り口は極めて親しみやすいにもかかわらず，同時に奥の深さも秘めていることも，このアート・ワークショップの魅力の一つであろう。

また報告者は，参加者に多くの障害者が含まれるような機会においても，このワークショップを展開してきたが，時には，その障害ゆえに紙コップを積み上げるという行為が困難である参加者が含まれる場合もあった。そのような機会においては，自ら積み上げることのできない参加者は，しかし他の参加者の積み上げた成果を崩すことに喜びを見出すことが多かった。ある種の条件設定は必要とされるが，重篤な障害とともに暮らす人びともこのアート・ワークショップを楽しむことができるのである。

報告者は自らの勤務する大学の，新入生を対象とした大学入門科目においても，このアート・ワークショップを取り入れている。もちろん報告者の勤務先はいわゆる美術大学であり，このアート・ワークショップにある種の造形訓練としての意義も込められている。しかし私たち入門科目担当者は，ある種の社会人力の育成を目的として，学生たちに取り組ませてきた。その社会人力とは，グループワークにおいて必要とされる，さまざまなマインドセットである。

私たちは学生たちを30人程度からなるいくつかのグループに編成する。このグループ分けにおいては，学生の専門領域や入試等から判断される個人の能力的な特性には一切配慮せず，全くアトランダムに編成する。そして学生たちの個々の役割についてこちら側から一切，指名することも指導することもなく，紙コップを素材としたアート・インスタレーションの作成に取り組むように指示するのである。

このアート・ワークショップにおいて学生たちは，大量の紙コップを目にして様ざまな可能性に心をときめかせ，話し合いや実験的な制作を繰り返していく中で，リーダーやリーダーを助けるフォロワー等の役割分担が形成されていく。このようにして学生たちは，社会的な活動の遂行において有効なグループワークの実践的な経験を積むことが期待できるのである。時には，どうしてもグループワークの輪の中に入ることのできない学生が現れることもあるが，しかしその場合も該当する学生のその後の指導に有効な情報を得る機会となりえる。

このアート・ワークショップの遂行にあたって最も注意しなければならない点は，とにかく大量の素材を用意することである。想像を超えた大量の素材は，それを目にした参加者の遊び心や挑戦心を大いに刺激し，笑顔に満ちた共同作業の場を担保してくれる。

註　報告者のこれまでの取り組みについては，以下の報告を参照されたい。

SHIMASAKI, Kyoichi, “Large Paintings and Art Installations by Joining Hands. Art Workshops for Intellectually Disabled Children to Overcome Ableism”, 2nd International Conference, “Art, Illustration and Visual Culture in Infant and Primary Education. Universiade de Aveiro, Porutgal, 2012 http://www.proceedings.blucher.com.br/article-details/large-paintings-and-art-installations-by-joining-hands-art-workshops-for-intellectually-disabled-children-to-overcome-ableism-18735

島先京一，「みんなで描いた大きな絵，みんなで作ったアート・インスタレーション　能力主義を乗り越えるアート・ワークショップの試み」，成安造形大学紀要第３号，2012